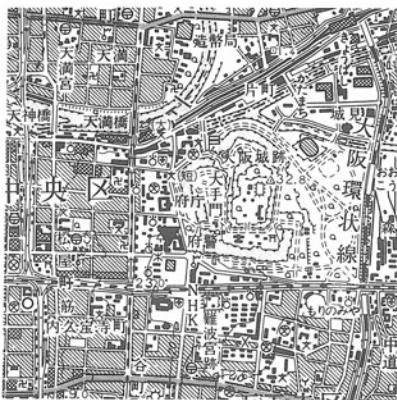


## 大阪・難波宮跡

なにわのみや

ていたものの、古代に遡る遺構は全く検出できなかつた。

1 所在地 大阪市中央区大手前三丁目  
2 調査期間 一九九九年（平11）一月～一月  
3 発掘機関 (財)大阪府文化財調査研究センター  
4 調査担当者 江浦 洋・本田奈都子・小林和美  
5 遺跡の種類 都城跡  
6 遺跡の年代 七世紀～八世紀  
7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



(大阪東北部)

遺跡は難波宮跡の北西に位置し、(財)大阪市文化財協会の調査によつて、前期難波宮段階の倉庫群や石組み溝などを検出した前期難波宮内裏西方官衙地域とは、本町通を挟んで隣接する。(大阪市文化財協会『難波宮址の研究第十一』二〇〇〇年)。

今回の調査では、地形的に高い南半が徳川大坂城築造時の大規模な削平を受けおり、豊臣大坂城に関連する遺構はわずかに遺存し

それに対し調査地北半では、幅三〇m以上深さ一〇m以上の東西方向の深い谷を検出している。この谷の上層では豊臣大坂城段階の遺構面を重層的に確認、礎石建物や区画溝などを検出し、別に報告している当該期の木簡も多数出土している（本誌五三頁）。

木簡が出土した古代の包含層は、現地表面からおよそ八・〇mの

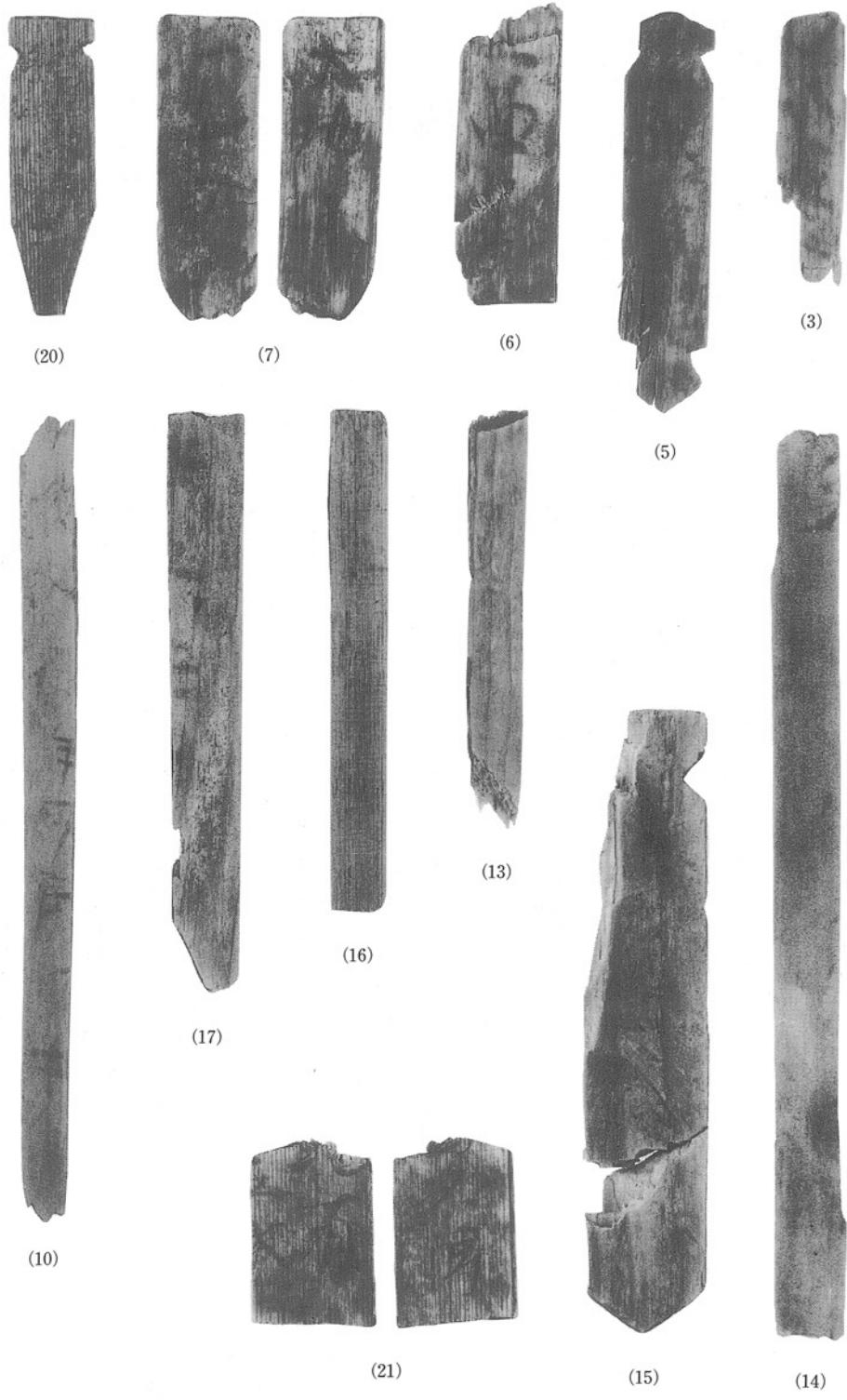
深度で堆積しており、間層を挟んで上下二層に分かれる。上層の一四層は平均して厚さ一〇cm、同層からは後期難波宮に伴う重圈文軒丸瓦が出土し、奈良時代以降に堆積したものであることが判明している。また、その下層には一五層とした砂層をはさんで、木簡群などを出土した一六層が層厚約一五cmで堆積している。一六層では五〇cmから一mを超える花崗岩が二〇数個前後で集積している部分を確認している。これらの花崗岩はいずれも元來の位置をとどめるものではないが、何らかの目的をもつて人為的に運び込まれたものであることは明らかである。なお、木簡はこれら花崗岩集積の東側、東西約一五m南北約一〇mの範囲でまとまって出土し、周辺からは多量の土器のほか、土馬や絵馬、人形などが出土している。

今回の調査で検出した谷は、周辺部の調査成果とあわせると、調査地付近では推定幅六〇m前後であったと考えられる。建物や区画に関わる遺構は検出されなかつたものの、難波宮の北限を考える上でも重要な位置にある谷といえよう。

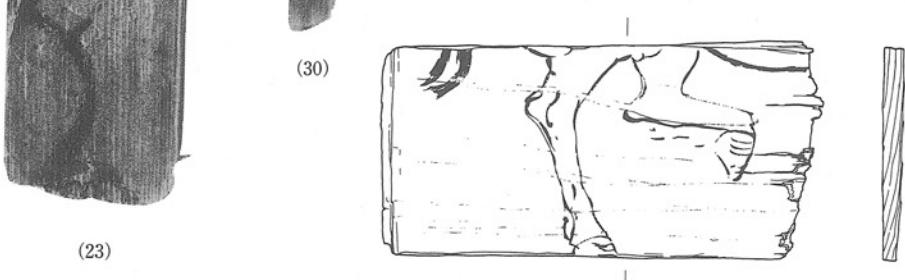
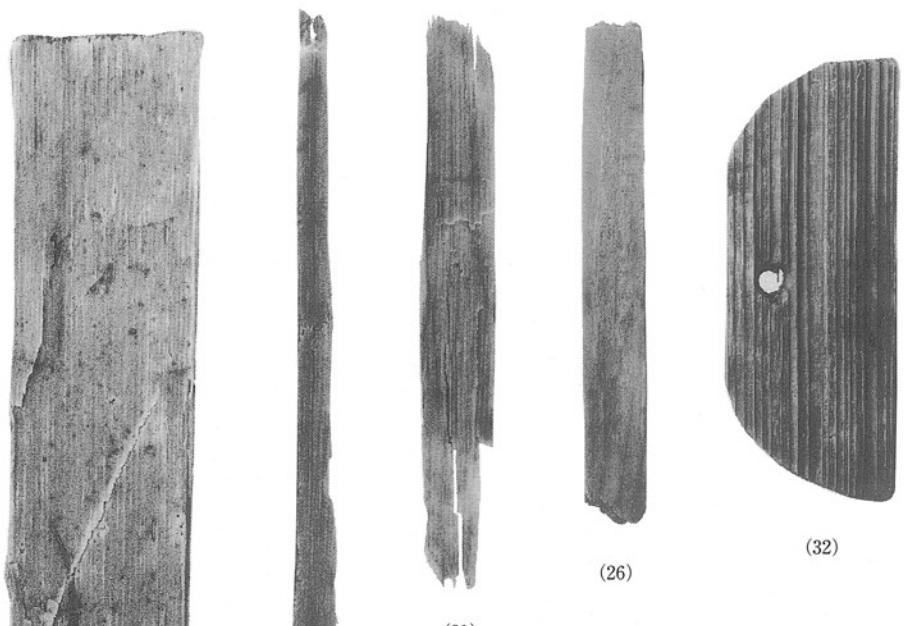
8 木簡の积文・内容

(1)	秦人凡国評」	(104)×23×5 019*	「〔異筆 <sup>1</sup> 〕〔稻筆 <sup>2</sup> 〕 支□乃□」	戊申年□□□ 〔連カ〕	(11)
(2)	「▽支多比」	107×17×4 032*	佐□□十六□	（202）×(27)×3 081*	
(3)	□□□□	(59)×(16)×2 081		125×16×3 032*	
(4)	「▽委尔ア栗□□」	96×20×4 032*		(90)×(13)×5 081	
(5)	「▽□□▽」	86×19×3 031	（192）×(14)×2 081		
(6)	□面□	(64)×23×4 019	「▽□□□」	134×27×3 033	
(7)	・「大□□ ・「□□」	(66)×22×4 051	「□」	(108)×12×2 019	
(8)	「鳴意弥荷□八□□」	125×30×4 011*	□□□□	(126)×(16)×4 081	
(9)	・「▽王母前□ ・「▽□□廿□□」	166×28×5 032*	「□止你乃止……□□」(刻書) 「□ア在□□……□」(刻書)	146×28×3 032*	
(10)	□□□□□ 〔牟カ〕 □□□□□ 〔井カ〕	(173)×(12)×3 081		(67+61)×19×2 011*	
(20)	「▽□□□」	66×19×3 033			

1999年出土の木簡



1999年出土の木簡



・ □「不得」

(32) 

(88) × (34) × 6 065

50

・ □「有  
〔三枝アカ〕」

□□□  
〔三枝アカ〕

「(絵画)カ」

□□

□□

□□

□□

□□

□□

□□

□□

□□

□□

□□

□□

(31)

(30) (29) (28)

(27) (26) (25)

(24) (23) (22)

(21)

(41) × 27 × 4 019  
(64) × (24) × 1 081  
(177) × (38) × 9 081  
(41) × (27) × 4 081  
(57) × (12) × 3 081  
(101) × (17) × 2 081  
(57) × (9) × 2 081

(1)は上端部が折れて欠損している以外は完存。表面の墨痕はさわめて明瞭で、残存部位に残る「秦人凡国評」の釋文に異論はない。(2)は「支多比」と記され、(12)の「玄」、(18)の「伊加比」とともに食料品の付札木簡である。(4)は委専部某という人物名のみを記した木簡。名については「栗□□」としているが、栗の字については「西不」の一文字となる可能性も残る。(5)は一文字であることが確認できるが判読できない。(6)は上端を欠損するが文字は表面に三文字確認できる。「文字目は「面」の可能性が高いが、「酉」の可能性もわずかに残す。ただし、三文字目については、「年」の可能性は低く、「子」などの可能性も残る。なお、出土木簡の樹種の多くがヒノキであるなかで、本例は(15)(18)とともにスギである。

(7)は表裏とも文字が書かれており墨痕が観察できる。表面の一文字目は「大」として異論のないところであるが、二文字目は「𢃤」のほか、「地」や「地」などの可能性も残る。裏面にも墨痕があるが、文字数も確定できない。(8)はほぼ完存する木簡。一文字目は「嶋」、二文字目は東野治之氏の教示により「意」。三文字目は「絲」である可能性も指摘されるが、旁が「糸」ではなく、「専」である」と、二文字目との関連から東野氏が指摘するように「意弥」(オミ)と読むことが穩當であると判断する。四文字目は「荷」

であることに異論がないが、五文字目以下については一部が読みとれる以外は不明である。

(9)は出土木簡の中でも最も丁寧な整形が行なわれている。表面側の文字は、上半部に大きく「王母前」と書く。また、その下方に小さく、やや右寄せ気味に四文字を書いている。いずれも断片的であることから内容は不明である。裏面には表面と同様、全体に墨痕が確認できるが、下半の「廿□」以外は判読が不可能である。なお、「□」については「足」とみて単位であるとする見解もある。また、表面の「王母前」については积文に異論はなく、現状では宛先を示すものとみる見解が大勢を占める。

(10)は九文字分の残画が確認できるが、割れて右半分が欠損しているため、文字を特定することは困難である。ただし、一・三・六・八文字目は左半がカタカナの「フ」のように見える点で「不」や「マ」などの同じ文字である可能性がある。

(11)は上端および右側面の一部が原形を保つ紀年銘木簡。墨書は表裏両面に確認でき、異筆による書き込みがある。表面側の墨書は上端から約7cmの位置から「戊申年」ではじまる文字が書かれ、以下、現存部分のみで三文字が後続する。また、欠損した左側面には「戊申年□□□」の文字に対応するように文字の一部が残っており、本来は同じ字配りで最低でも二行以上の墨書があつたことになる。

なお、「戊」および「年」の書体については柴原永遠男氏によつ

て七世紀中頃前後の事例と共通する古い書体であることが指摘されており、共伴した土器の年代観などを含めて戊申年が西暦六四八年に該当することはほぼ動かない。なお、年紀部分の下方の文字については残画が少なく判読できない。また、左列最下の文字については「連」の可能性が高いが、これも確定できない。また、上端部の三文字は異筆である可能性が高く、墨の濃淡や字体からみて、一文字目と二・三文字目もそれぞれ異筆である可能性が高い。

裏面は上端からすぐに二行が書かれ、下半は上半の行間の位置に一行書かれている。上半の右行は墨痕のみで判読できず、字数も不明、左行は、一文字目は「佐」で、四・五文字目は「十六」の可能性が高い。下半には四文字書かれているが、書き出しの位置や墨の濃淡、書風の相違などから、これも異筆である可能性が高い。

(13)(14)はわずかに墨痕が確認できるが、判読不能。(15)は一片に折れており、上部左側を欠失する以外はほぼ完存。表裏ともに丁寧に整形されるが、裏面には墨痕はない。また、表面には三文字分の墨痕が確認されるが、二文字目が「支」のごとき文字である以外は判読できない。(16)はわずかに墨痕が残るのみで詳細不明。(17)は薄く残る墨痕によって、残画から大ぶりの文字が四文字書かれていたことがわかるが、判読できない。(18)は切り込み上方を欠損するがほぼ完存。片面中位にやや小ぶりの字で「伊加比」の三文字が書かれている。

(19)は直接的には接合しない二片からなる刻書木簡。二片とも表裏に

刻書があり、一文字目は明瞭に字画を追えるが不明、二～五文字目までは釈文の通りである。

(20)は完存する小型の木簡であるが、墨痕は不鮮明。(21)は上端が二次的なキリオリで、これは廃棄作業に伴うものである可能性が高い。

表面の一文字目は文字の一部が残るものである。その下方の「不得」に異論はない。裏面には二行の文字があり、右行一文字目は「非」の可能性が高く、二文字目は「有」で問題ない。左列は鎌田元一氏の観察により「三枝ア」の可能性が指摘されている。

(22)は四周いずれも原形を留めていない。表面には三文字分の墨痕が認められ、三文字目が東野治之氏により「尊」の可能性が指摘される以外は判読できない。(23)は左辺が一次的に整形されており、表面の残存部分で弧状の墨線が四本描かれている。少なくとも文字や記号とは考えにくいことから絵画かと思われるが、天地の方向や何を表現したものかは不明である。

(24)～(31)の大半は一六層から取り上げた大量の木片を赤外線テレビカメラ装置によって確認する作業によつて見いだしたものであり、厳密な意味では出土地点を特定することはできない。いずれもかろうじて墨痕が確認できるものであり、(27)の表面でかろうじて筆跡を追える以外は判読不能である。

(32)は半円形に加工した木製品であり、円弧側に穿孔がある。表面にみえる墨痕は、比較的明瞭ではあるが、複雑に錯綜した部分もある。

り、文字か否かという点も方向も判断できない。

なお、これ以外に墨痕は確認できないが、付札状の木簡状木製品（長さ（一四八）mm幅二一mm厚さ三mm、○五九型式）が一点出土している。

なお、木簡の釈読には栄原永遠男氏をはじめとして綾村宏氏・鎌田元一氏・館野和己氏・寺崎保広氏・東野治之氏・直木孝次郎氏・古市晃氏・渡辺晃宏氏のご教示を賜った。

## 9 関係文献

（財）大阪府文化財調査研究センター「難波宮跡北西の発掘調査」大阪府警察本部新庁舎新築工事に伴う大坂城跡（その6）発掘調査速報（二〇〇〇年）

栄原永遠男「難波宮跡西北部出土木簡の諸問題」（『大阪の歴史』五五 二〇〇〇年）

「特集 難波宮出土の木簡と大化革新」（『東アジアの古代文化』一〇三 二〇〇〇年）

江浦洋「難波宮跡」（『発掘された日本列島』一〇〇〇 一〇〇〇年）

（江浦 洋）